レンゲツツジ

五輪競技復活へ走り続ける

ソフトボール元日本代表監督、NPO法人「ソフトボール・ドリーム」理事長
宇津木 妙子

＊毎週日曜日掲載

4月29日、東日本大震災の爪痕がいまだに残る宮城県気仙沼市を訪れた。私の名前を冠した「震災復興祈願 宇津木妙子杯中学生交流ソフトボール大会」に参加するためだ。一日も早く子供たちに笑顔を取り戻してもらおうと企画したこの大会も、今年で3回目を迎えた。

取り組みを始めたのは、震災直後の2011年6月。自宅のある高崎市にNPO法人「ソフトボール・ドリーム」を設立したのがきっかけだ。

シドニー、アテネ両五輪で代表監督を務めた後、09年まで、ルネサス高崎（現ルネサスエレクトロニクス高崎）の総監督として現場に立ち続けた。ようやく一線を退き、今度は普及活動に力を入れようと準備を進めていたその時、「3・11」が起きたのだ。NPOの活動理念には、東北地方の復興支援も明記した。

2年前の第1回大会であどけない表情を見せていた1年生も、今や立派な最上級生。回を重ねるごとに上達し、表情も前向きに、明るくなってきたように感じる。

被災地の少女たちと笑顔で交流する宇津木さん（4月29日、宮城県気仙沼市で）

でも、心に負った深い傷は簡単には癒えない。グラウンドの片隅でジャージー姿の新入生2人と談笑していた時、ふと、震災当時のことを口にしたら、みるみる目を潤ませて黙り込んでしまった。

すぐ話を切り替えて、「でもね、私は毎年ここに必ず来るから、来年はもっと成長して、絶対にレギュラーになるんだよ」と伝えたら、元気よく「ハイッ」と返事が返ってきた。ちょっと心配になったけれど、懸命にグラウンドを駆け回り、炊き出しでおいしそうにカレーうどんをほおばる笑顔を見たら、本当に救われた気持ちになる。「今年もやってよかった、来年も絶対にやろう」――って。彼女たちに寄り添い、たくましく成長する姿をしっかり見届けるのも、私の使命だと思っている。

当日は、元日本代表エースの高山樹里、バッテリーを組んだ千葉（旧姓・山田）美葉もボランティアで駆けつけてくれた。シドニー大会で銀メダルを獲得するなど、五輪の舞台で活躍した2人の指導を受け、選手たちも大きな憧れを抱いたことだと思う。

だからこそ残念でならない。08年の北京大会を最後に、ソフトボールは五輪競技から外れたまま。少女たちの夢もそこで途絶えたままなのだ。世界最高峰の舞台で戦う誇りと喜び、緊張感を若い世代にも絶対に味わわせてあげたい。20年東京五輪での競技復活を目指し、この身をささげて走り続けるつもりだ。それが、私を育ててくれたソフトボールに対する一番の恩返しだと思っている。